

スペイン語圏を知る本 (その52)

佐竹 謙一 著 『概説 スペイン文学史』
(研究社、2009)

評者 坂東 省次

最近、スペインから流れてくる声の一つに、文学部の学生の減少で学部消滅の危機を嘆くものがある。かなり深刻であるらしい。日本でも同じような傾向にあるようで、今やシェイクスピアを講義する授業は少ないようだ。しかしである、このような時にこそ、文学を語り論じる教授が必要なのであり、教授の学問に対する情熱によって、学生も学問に目覚めるのである。

その好例を、著者佐竹謙一教授に見る人は少なくないだろう。佐竹教授は今やスペイン文学を語る数少ない日本人学者である。授業とスペイン文学に対する情熱から、この度、『概説スペイン文学史』が誕生した。加えて、佐竹ゼミからM嬢というピオ・バローハ研究者が誕生し、今年、ピオ・バローハ著『知恵の木』(水声社)の翻訳が上梓された。

本書は帯にもあるように、「日本語で書き下された唯一のスペイン文学通史」であり、「今、注目のスペイン文学の世界に」読者を「案内」してくれる。ただし、「あとがき」でも断っているように、本書はスペインのスペイン語文学通史であって、ガリシア語、カタルーニャ語、バスク語などこの国の少数言語の文学は扱っていない。これは日本におけるスペイン文学研究者の今後の課題であろう。

本書は全体が第1章「中世 1-13」、第2章「黄金世紀 1-18」、第3章「18世紀 1-5」、第4章「19世紀 1-9」、第5章「20世紀 1-12」の5章から成る。佐竹教授の専門はスペイン文学であるが、とくに黄金世紀を研究対象としており、ロペ・デ・ベガ、カルデロン、セルバンテスなどについてすぐれた研究を発表している。100ページを数える「黄金世紀」は本書の醍醐味であろう。

黄金世紀の頂点をなす名著『ドン・キホーテ』の著者セルバンテスについては、劇作家と小説家に分けて紹介をすすめる。なかでも、小説『ドン・キホーテ』については内容の紹介に加えて、「物語の作者」と「前編と後編の技法のちがい」の項目を設け、後者の「前編と後編の技法のち

がい」では、すでによく知られているマダリアーガのドン・キホーテ論を引用して、ドン・キホーテ主従の内面の変化についてこう述べている。

「前編と後編では物語の構造が大きく変化することに加えて、ドン・キホーテ主従にも心理的な変化があらわれてくる。いわゆる、ドン・キホーテのサンチョ化、サンチョのドン・キホーテ化である。(・・・)サンチョのほうはますます自信をつけ、口上手になっていく。こうして勢いづいたサンチョがドン・キホーテ化し、気概をなくしつつあるドン・キホーテがサンチョ化することになる。」

マダリアーガのドン・キホーテ論は、『ドン・キホーテ』の前編・後編を読み解く上で読者には分かりやすいアプローチであろう。ただし、そろそろ新しいドン・キホーテ論の登場が期待されていることもまた事実である。

黄金世紀に次いで人気のある時代というウナムーノやバローハの98年代の世代や、ロルカの27年の世代であろうか。「あとがき」にも書かれているように「18・19世紀のように他国からの影響を受け、二番煎じの感が否めない作品が登場する時代もあるが、それはそれでまた別の角度から見ると、スペインならではの人々の虚像と実像や、日頃ほとんどわれわれの目に触れることのない社会の表裏が顔をのぞかせることになり、味わい深いものになっている。」

18・19世紀のスペイン文学といえば、なによりも写実主義小説家のペレス・ガルドスや自然主義の小説家のプラスコ・イバーニェスが思い出される。プラスコ・イバーニェスは当時、世界的に有名な作家として知られ、日本でも多数の翻訳が出版されたが、『血と砂』や『葦と泥』などの名著はすでに日本語が古く、若い読者には読めないのではないだろうか。名著の新訳出版で、スペイン文学が新たに脚光を浴びることを密かに期待したい。

ばんどう しょうじ (教授・スペイン語学)